

特別展示

ジャネット カーディフ「40声のモテット」

会期：2025年3月15日 [土]－5月11日 [日]

主催・会場：原美術館ARC 協賛：エルメスジャパン株式会社



[展覧会詳細はこちら](#)

写真及び動画の撮影はご遠慮ください。

展示室内では飲食および、作品に触れることはできません。小さいお子様は大人の方と手をつないでご鑑賞ください。

Gallery A				
作家名	作品名	制作年	素材・技法	サイズ
ジャネット カーディフ	40声のモテット	2001	サウンドインスタレーション	14分

磯崎新が設計したギャラリーAは、杉柱4本に支えられた高さ12mの天窓から自然光が降り注ぎ、太陽の面前を雲が横切る度に光が移ろう空間です。現代美術作品に適したホワイトキューブの特徴を備えながらも自然の息遣いが感じられ、「間」という日本的な時間・空間の美意識を論じた磯崎が設計したこの空間で、「40声のモテット」ジャネット カーディフによるサウンドインスタレーションを展覧しています。トマス タリス(16世紀イングランド王国の作曲家、王室礼拝堂オルガン奏者)が作曲した「40声のモテット*」をもとに制作されたカーディフの同名の作品は、2001年の発表以来、ニューヨーク近代美術館（MoMA）を始め世界各地で紹介され続けている彼女の初期代表作です。

作品の形態として目の前にあるものは楕円形に立ち並ぶ40台のスピーカーのみですが、その一台一台から一人一人の声が聞こえ、徐々に歌声が重なり合い、やがて展示室は40人が今ここで歌声を響かせ合っているかのような臨場感のある場へと変化してゆきます。言葉にすればわずか数行ながら、音が構築する彫刻的空間の体験は圧倒的であり、アートが言葉ではすくいきれないものであることを実感する作品です。

原美術館ARCでは、その前身である原美術館（東京・品川）時代から、自館の建築や環境と作品によって“ここにしかない”時空間が立ち現れることを鑑賞体験として重視してきました。「40声のモテット」と原美術館ARCのギャラリーAも、ここにしかない輝きを放つ一期一会の展示となることでしょう。

*モテットとは多声楽曲のジャンルのひとつで、中世からルネサンスにかけて成立・発達したキリスト教音楽のこと。40 声 のモテットは、40の声部数を使って作られている。 ジャネット カーディフによる「40声のモテット」は、トマス タリスの40声のモテット「Spem in Alium」を歌う40人の声が楕円形に配された40 台のスピーカーから別々に再生されるサウンドインスタレーションである。5 声（ソプラノ、アルト、テノール、バリトン、バス）からなる8つの合唱団の音声を録音し、構成されている。

ジャネット カーディフの「40声のモテット」は、もとはフィールド アート プロジェクトにより、アーツ カウンシル イングランド、カナダ ハウス、ソールズベリー フェスティバル、ソールズベリー大聖堂合唱団、バルチック ゲーツヘッド、ニュー アートギャラリー ウォルソール、ナウ フェスティバル ノッティンガムと共同で制作された作品です。

ジャネット カーディフ / Janet Cardiff

ジャネット カーディフ（1957-）はカナダのブリティッシュ コロンビアにある自然豊かな街を拠点に活動している。1999年にはカーネギー インターナショナル（ピッツバーグ）に出品。2001年にはジョージ ビュレス ミラーとのコラボレーションで、カナダ館代表としてヴェニス ビエンナーレに参加し特別賞を受賞した。以後もミラーと共同で、音響、メディア技術を駆使した独創的なインスタレーションを手掛け、世界各地の美術館で展覧会を開催している。

日本での人気も高く、横浜トリエンナーレ2005、あいちトリエンナーレ2013などの国際展への参加、銀座メゾンエルメス フォーラムでの「40声のモテット」展示（2009年）の他、金沢21世紀美術館（2017年）で展覧会を開催。ベネッセアートサイト直島の常設作品「ストーム・ハウス」も人気を博した（2010-2021年）。



[過去の「40声のモテット」展示映像 \(YouTube\)](#)

この、原美術館 ARCという時間芸術

会期：2025年3月15日 [土]－5月11日 [日]、5月16日 [土]－7月6日 [日]

主催・会場：原美術館ARC 協賛：エルメスジャパン株式会社

 **マークの作品は写真撮影が可能です。**
ギャラリー内での飲食および、作品に触れることはできません。小さいお子様は大人の方と手をつないでご鑑賞下さい。

Gallery B				
作家名	作品名	制作年	素材・技法	サイズ
ソフィ カル	限局性激痛（第1部）	1999	写真とテキストによるインスタレーション	
倉俣史朗	花瓶 #3	1989	アクリル、ガラス管	27 x 26 x 8 cm
 宮島達男	時の連鎖	1989/1994/ 2021	発光ダイオード、IC、電線	22 x 475 x 4.7 cm 22 x 237.5 x 4.7 cm
倉俣史朗	インペリアル	1981	木にラッカー塗装	35 x 150 x 40 cm
 奈良美智	My Drawing Room	2004/2021	ミクストメディア	312 x 200.5 x 448 cm
 束芋	真夜中の海	2006/2008	ビデオインスタレーション	4分
Gallery C				
作家名	作品名	制作年	素材・技法	サイズ
ソフィ カル	限局性激痛（第2部）	1999	写真とテキストによるインスタレーション	
名和晃平	PixCell-Bambi #2	2006	ミクストメディア	31.5 x 51 x 20 cm
宮脇愛子	メグ	1972	ガラス	20 x 120 x 81.5 cm
草間彌生	ミラールーム（かぼちゃ）	1991/1992	ミクストメディア	200 x 200 x 200 cm
展示室外				
作家名	作品名	制作年	素材・技法	サイズ
 三島喜美代	Newspaper-84-E	1984	セラミック、シルクスクリーン	105 x 74 x 102 cm
 ソル ルウィット	不完全な立方体	1971	アルミニウムにペイント	120 x 120 x 120 cm

世界的に注目されるフランスの女性現代美術作家、ソフィ カル。
「限局性激痛」（1999年）は25年前に原美術館で展示され、大きな反響を呼びました。日本滞在が契機となって誕生した本作は、日本で最初に発表したいという作家の希望を受けて原美術館（東京・品川。2021年閉館）で1999年に世界初公開。原美術館での展覧会のためにまず日本語版が制作され、その後フランス語や英語版が世界各国で発表されました。
「限局性激痛」とは、身体部位を襲う限局性（狭い範囲）の鋭い痛みや苦しみを意味する医学用語で、本作はカル自身の失恋体験による痛みとその治癒を写真と文章などで作品化したものです。人生最悪の日までの出来事を最愛の人への手紙や写真で綴った第一部と、自分の不幸を他人に語り、代わりに相手の最も辛い経験を聞くことで自身の心の傷を少しずつ相対化していく様を写真と刺繍とで綴った第二部とで構成されています。
自身の人生をさらけ出し、他人の人生に向き合うカルの制作に多くの鑑賞者が心を打たれる一方で、カルの作品には常に曖昧さが漂い、全てを素直に信じることの危うさも問題にしています。

ソフィ カル / Sophie Calle
1953年パリ生まれ。見知らぬ人々を自宅へ招き、自分のベッドで眠る様子を撮影したものにインタビューを加えた「眠る人々」（1979年）や、ヴェネツィアのホテルでメイドをしながら、宿泊客の部屋の様子を撮影した「ホテル」（1981年）、拾ったアドレス帳に載っていた人物にその持ち主についてのインタビューを行い、日刊紙リベラシオンに連載した「アドレス帳」（1983年）など、彼女の作品は常に論争を巻き起こしている。
90年代の「本当の話」や「ヴェネツィア組曲」など初期の代表作を制作する一方で、「盲目の人々」（1986年）から始まった盲人に焦点を当てたシリーズにおいて、美術の根幹に関わる視覚・認識についての深い考察を行っている。